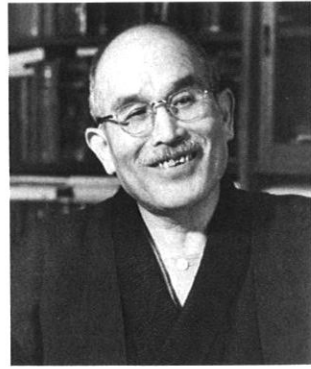


『新文人主義』



中村素堂先生

日本・中国の書道における名蹟とその作者を考えてみると、詩人、学者、歌人、宗教家、政治家、武人、画家、みんな何らかの専門とするものがあり、教養として趣味として、あるいはその本職附帯の必要から書を能くした人々ばかりといつても過言ではない。

したがって書以外にその人間を陶冶しているものが、その筆蹟の上に匂って、いわゆる胸巻軸に富むといった——書巻の氣と相俟ってひとつの書作品を形成しているものが多い。

しかし時代は推移して、いかなる仕事の分野も細分して、一個専門の追求を遂げるようになってきた。

農業についてみても、米作農家、蔬菜農家、酪農、果樹、その果樹もさらにリンゴ、梨、葡萄、苺、蜜柑などと専門化している。

書においても、仮名、漢字の専門くらいはもとよりあったが、古典、新古典、近代詩文、墨象、少字などと分かれ、つい十数年前に漢字仮名の作品を「調和体」といった尾上柴舟先生による新造語などは、もはや古典語となつてしまった。

それだけではない。一時の六朝風の流行、または明清の流行、あるいは篆隸への注目など、時とともに書体・書風の拠りどころまで推移し、かつまたその研究も逐年精緻を極めつつある現状で、書道が教養・趣味といったスタンドポイントに立つて鑑賞された時代は、既に遠い過去となつたかの感がある。

しぜん技術屋的な書というものも多くなって、書に新しいジャンルが成立するのも知れないと思うこともある。しかし、その技術だけの書境を建設するとしても、今日の書としては、その技術が芸術として、この時代に憩える意義と構成の基本に対しては、やはり

相当突つ込んだ研鑽がなされなければならない。この追求の足りないものは、一時の新風に眼を潰らせたとしても、いつしか影を薄くして潰え去るようである。

書が文字性から全く分離するまでは、文字の持つ、すなわち一字にさえ託されている文学性に対する考察がなければならないのであるまいか。書かれてある文字の構成している文学が、知らず識らずその書風とマッチしているか否かに対する感覚の眼ざめというか研究というようなのが、このごろの書作展に逐年多く見られるようになってきている。

単にその書だけではなく、その料紙、墨色、潤渴、裝潢にまで苦心されているものを見る時、この一科目の芸術にも、今日は今日における新しい追究、研鑽が深められているのに注目させられるのである。

書が文字であるかぎり古典は大事な足場である。この足場の上に近代的な文字の鑑賞と造形、附帯的意匠といったものが要求されていると思う。

私は僭越な申し分であるが、これを新文人主義といっている。こんな勝手な言葉を口にしてみると、何か目新しいものが生まれそうな気はするけれど、さて実作してみるとそういう安易は許してくれないが、眼はそういう方向にむけて考えてみると意外な興味も生まれてくるというものである。

〔祭墨〕昭和四十九年十月



「曲肱」 —昭和50年—